



イーजीリーダー集「森の夏」

第一話 ロリン

ぼくの住む柑子（こうじ）町の裏山を川沿いに上っていくと台地があつて、川が細くなり、やがてちよろちよろ水になり、小道もなくなり、じゅくじゅくしたゆるい斜面を滑らないように気をつけて上ると、竹やぶになります、そこで行き止まりです。

だいぶ前のあるときぼくはさらに草木をかき分け、竹やぶをくぐって道なき道を進みました。

実はぼくの趣味のひとつは河川の源泉を探しに行くことです。最初はスケッチ目的で野山を歩いていましたが、ハイキングにもう一つ目的を持たせようとして始めたことです。逆にこの川はどういう所を通って海にそそぐのかと河口を目指すこともしましたが、これはサイクリングで何度かしました。こちらはすぐに飽きてしまいました。結局前回は行ったところと同じ河口に到着する場合があります。源泉探しはまだ続いています。今ではぼくのスケッチブックには源泉にたどり着くための手書きの地図が十数ページあります。たいてい丘や山の麓の湧き水です。一時は絵描きになりたかったこともあるぼくは小さなスケッチブックをいつも持っており、気に入った風景に巡り合うと、鉛筆でスケッチします。だいたい4，5分で一枚です。

もう一つの趣味はハーモニカで、これの練習が思う存分できる場所もあちこちに見つけてコレクションしています。家で吹くと周りから注意されることがあるからです。そして多くの場合、源泉を見つけるのとこれと一石二鳥です。

でだいぶ前のことですが、前記した竹やぶに入り、竹笹のトンネルをくぐると森になり、その中に湖を見つけたのです。きっとこの湖が柑子町を流れる川の源泉です。ちかくに丘も小山もないので、この湖の中で鉱泉が湧いているのだと思います。

この湖はぼくの気に入りの秘密の場所でたぶんほかの人は知りません、だからそこへいく方法は書きません。濡れた地面を進んでいけばいいという簡単なものではありません。

でもその様子をそっと教えてあげましょう、特に動物が好きな人に。

でもこれを読んでもみなさんは行かないほうがいいです、
迷子になったらことですから。

これはぼくの友達のカエルのロリンに初めて会ったときの話でもあります。

この静かな湖にぼくは一人乗りの小さなボートを置いています。いつもは水辺の大きな檜の木の下に引上げて裏返しておくのですが、やがてこの力仕事は面倒になって水に浮かべたままその木にボートのともづなをかけておくようになりました。

あるときそのつなはずれていてボートは湖の真ん中にありました、つなをはずした犯人はいたずら好きのイタチのフクスケにちがいませんでした。その証拠に、彼がよく食べるザリガニの食べかすがボートの中に転がっているのをあとで見つけました。

しかたなくぼくは素っぱだかになって泳いでボートまで行ったのです、といっても二十メートルくらいのことですが。

そしてそれはそのときのことです、ボートによじ乗って高い木の陰に寄せて、昼寝をしていると、ぽつぽつと雨が降り始めました。

目をあけると、ぼくのボートのへさきに緑色の小さなカエルがぴよんと乗ってきました、

「やあ」と言葉をしゃべります。

「あつ、雨（あま）ガエルさんですか？」ぼくは驚いて聞きました。

「ケロケロ そう、ぼくは雨好きの雨ガエルです」

「名前はなんていうの？」

「ケロケロ ぼくには名前はありません、カエルは名前なんて付けないのです。そのかわりみんなあだ名を付けます」

「じゃあ、君のあだ名はなんていうの？」

「ぼくのあだ名はロリンです」

「いいあだ名ですね、でもどうしてカエル君たちは名前を付けないのですか？」

「ケロケロ 昔はつけていたのです。でもすぐにやめてしまいました。それはしかたがないことでした」

「どうしてやめてしまったの。どうしてしかたがないことなの？ぼくに話してくれないかい」

雨が少し音を立てるくらいになったので、ぼくはボートに置いてあった日よけ用のパラソルを差し、そのカエルにも雨が当たらないようにしました。

「話しましょう。ケロ、ぼくの上にパラソルを持ってくるのはやめてケロロ。せっかくいい雨が降っているというのに・・・」

「おや、これは失礼。雨ガエルさんはやっぱり雨が好きなんですね。じゃあ存分にぬれてケロ」（ぼくも少しかえるの話し方につられています）

ぼくはパラソルを自分の上のほうにだけかざして話を待ちました。

「カエルの子供は一度に何百と生まれます。そしてカエルのお父さんお母さんは名前を付け始めます。初めて子供ができたお母さんとお父さんは特に有頂天になって考え始めます。きっと子供の名前を付けるのは楽しいことに違いありません。普通まずお父さんがカエルが適当な名を提案します。こんなぐあい

です。

「一番初めに卵から出てきたおたまじゃくしだからタロン」
するとお母さんガエルは「いいえ女の子かもしれないから、ロレア」
「二番目はよく泳ぐな、スイスイはどうだ」
「もっと強そうな、ズイズイ」
「三匹目、ケロロ」
「ケロロは隣の八番目の子と同じ名前で間違えてしまいます。ケルロにしましょう」
するとお父さんガエル「ケルロもどこかで聞いたことがあるような気がするぞ。でもまあいいや」
「四匹目、ケケケ」
「そんなお化けみたいな名前は嫌ですよ、お父さん、ケロリなんてどう」
「それもなんかおかしいな名だな。健康そうなケロンパぐらいにしておこう」
「五匹目、少し色が黒いようだからクロンはどう？」
「でもクロンボってあだ名付けられていじめられたらかわいそうよ、きれいなクリンにしましょう」
「六匹目、これはやせているな、ヒョロンはどう？」
「そんな弱そうな名前じゃかわいそう。素敵なヒューロにしましょう」
「七匹目・・・ねえ母さん、少しおなかがすいてきた、きょうはこのくらいにして二人で夕ごはんを見つけないこうよ」

といった具合で六匹くらい名前を付けると、たいていカエルの両親は名前を付けるのに飽きてきてしまいます。そして次の日にはもうほとんどの卵からおたまじゃくしが泳ぎだして、どれが何番目に出てきたのかわからなくなってしまいます。みんな区別がつかないのでせっかく名前を付けた「ロレア」「ズイズイ」や「ケルロ」「ケロンパ」「クリン」「ヒューロ」もどれがそれやらわからなくなってしまいます。そしてとうとうカエルの両親は名前を付けるのをあきらめてしまいます。

でもおたまじゃくしたちが大きくなり、やがて手と足が出てしっぽがなくなりお互いに話ができるようになるころ、名前がないと不便だからその頃になってみんなであだ名を付け合うのです。それでぼくたちにはあだ名はあるけど名前はないのです。」

ぼくは話をしてくれたお礼にカエルになった王子様の話をその小さな雨ガエルのロリンにしてあげました。最後にカエルが王子様に姿を戻すのがどうしてハッピーエンドといえるのかについて、ロリンは不思議がりました。そして「まあ人間の話はたいてい逆説的だから」と納得しました。そしてロリンはまた会おうねと言って、ボートの縁から湖の中に飛び込みすいすいと泳いでいきました。

雨はやみそうになかったので、ぼくはパラソルをたたんで蛙と反対側にボートを漕いで、大きな檜の木の方に帰ってゆきました。もちろんその日は、ボートを岸に引き上げ、雨が入らないようにひっくり返しました。

ではまた

